
IS インフィニット・ストラトス ~革新者 介入~

風霊使い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 革新者 介入

【Nコード】

N1041R

【作者名】

風霊使い

【あらすじ】

イノベーター 刹那 F セイエイ はティエリアと共に謎の重力波を調査していたが・・・

二人が目覚めると、そこは IS と呼ばれるマルチフォームスペースが発達した別世界の地球だった。

プロローグ（前書き）

この小説はISとガンダム00のクロスオーバー作品です。
チートが嫌いな人・キャラの微妙な性格の違いが気になる人・亀更
新、駄文が嫌いな人はお勧めしません。

プロローグ

この小説はISとガンダム00のクロスオーバー作品です。チートが嫌いな人・キャラの性格の微妙な違いが気になる人・亀更新、駄文が我慢ならない人はお勧めしません。

「刹那 F セイエイ、調査行動を開始する。」

ELSとの対話の後、人類は 外宇宙航行艦スメラギ による外宇宙への進出を成功させた。

多くのイノベーター達と共にスメラギの搭乗員となった刹那は現在、謎の重力波を感知したとの報告を受け、その宙域へと ELSクアンタ を駆り調査を行っていた。

「気をつける、刹那。ELS達が通って来たワープホールと同様のものである可能性が高い。」

「了解した、ティエ・なっ」

刹那がこの機体のもう一人の搭乗員であるイノベイド テイエリア・アーデ に返事をしようとした瞬間、機体に衝撃が走った。

「まずい、刹那。ワープホールに引き寄せられている。脱出しろ！」

「駄目だ！ツインドライブの力でも離脱出来ない！……うあああああ！」

刹那が悲鳴をあげた後、その宙域には何も残っていなかった・・・。

第0話 介入開始

「ここは……」

刹那が目を覚ますと、そこはパイプやコードで壁や床が埋め尽くされた研究室(?)の様な場所だった。

「おや？目を覚ましたかな？」

「！、誰だお前は……？」

声をかけてきたのは、まるでヘンゼルとグレーテルの服を合わせた様な珍妙な格好をした女性だ。

一見、無害な人間に見えるが刹那のイノベーターとしてのカンが囁いていた、「こいつは危険だ」と……

「そんな警戒心丸出しだと東さんはショックだよ。気絶していた君をここに運び入れたのは私はなんだよ。」

「東、それがお前の名か？」

「そだよ。天才の篠ノ之 東さん、それが私の名前なのだ。分かったかな、刹那・F・セイエイ君？」

「！、何故俺の名を！」

「それは、君のお友達のテイエリア君から聞いたからだよ。」

「？、どういう事だ？」

「うん、上手く状況を飲み込めていないみたいだね。まあ、仕

方ないかな。それじゃ〜まず、せつちーの置かれている状況を説明しましょ〜、そーしましょ〜。」

それから東と名乗った（恐らく偽名ではないだろう）は信じられない様なことを話し出した。

ここが俺達の知っている地球とは別世界の地球であること。この世界での地球では IS と呼ばれるマルチフォームスーツが発達していること。

そのISを開発したのが他ならぬ篠ノ之 東であること。

今の自分はワイプホールを通って来た際に何らかの影響で体が武力介入を始めた頃ぐらいに退化し、ELSは休眠状態に入ってしまったこと

などだ……」

とても嘘を話している様にも、知能が異常な様にも見えない。

「大体は理解した。」

「おや〜、案外驚かないんだね〜？」

「ワイプホールを通ったんだ、何が起きても不思議じゃない。それより、ティエリアは？」

「ああ、それなら今呼んで来るよ〜。ちょっと待っててね。」

そう言って彼女が持って来たのは剣と翼を型どった様な ソレスタ

ル・ビーングのシンボルを模したペンダントだった。

「それは？」

「ん〜、せつっのMSとやらがISに変化したものだよ。ワープホールを通った影響らしいよ、彼の話によると。」

「刹那。」

「テイエリアか！」

見ると、ペンダントの上方にホログラムの様な半透明の小さなテイエリアが浮いている。

「どうやら僕もワープホールの影響でクアンタごとISになってしまったらしい。」

「そうだったのか。いや、無事で何よりだ。」

「はいはい、感動の再会邪魔する様で悪いんだけど、せつちーには早速お願いがあるんだよね〜。命の恩人である束さんからのお願いだよ〜。実はせつちーにはIS学園に通って貰いたいんだよね〜。」

「IS学園？」

「うん、IS操縦者を育成するための高校だよ〜。じつはせつちーの今の状況は非常に不安定で危ないんだよ〜。社会的に。」

ISは一機でもあれば他国の軍事力を凌駕することもありしね〜。だから、どこの国にも族さないIS学園の出番なのだよ〜。幸い頼

りになる後ろ楯も居るしね。」

「成程、理解した。何かから何まで感謝する。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうした？顔が赤いぞ？」

「い、いや。なんでもないよ。さあ、そうと決まれば早速せつちーのIS ガンダム について説明しよう、そうしよう。」

「？」

「刹那、相変わらず君は鈍感だな。」

「どういう事だティエリア？」

「なんでもない……。」

第0話 介入開始（後書き）

いや、束さんの口調かきにくいなー（笑）

原作とかにあるシーンはそのまま流用出来るけど、今回の話はそれもいかないんですよ。

ちなみに分かりにくかったかもしれませんが「せつちー」というのは束が付けた刹那の呼び名です。解説付いてなくてすみません。一応、束ねが刹那に好意を向けていることの象徴にしたいと思います。

てなわけで、次回からは原作からの流用が多くなりますんで、ご了承ください。

ああ、文才が欲しい・・・

機体解説 ガンダム（前書き）

刹那の専用機の解説をします。

これ以降に物語中で機体についてね説明はなるべく少なくするつもりです。

機体解説 ガンダム

刹那の専用IS。

拡張領域が通常のISはるかに上回っており、多数のISアーマーを武装ごと量子化・保存してある。

それぞれのISアーマーはソレスタル・ビーング及びフェレシユテで用いられていたガンダムと同様の外形・性能を有しており、刹那は状況に応じて様々なISアーマーを選択・展開することができる。
(展開可能なガンダムにはイノベイド製造のガンダムは含まれない)
また、全てのISアーマーには「全身装甲である」・「GN粒子を用いている」などの共通点が存在する。

ただし、原因は不明であるが第4世代以降のガンダムのISアーマーはセキュリティがかかっており使用出来ない。(現在、ティエリアが原因を究明中である。)

元々はELSクアンタがティエリアごとISに変化したものであり、ティエリアはISの意味・太陽炉はISのコアへとそれぞれ変化している。

なお、ティエリアはホログラムの様なもので常時投影可能で、会話も行うことができる。(ティエリア曰く、ISアーマーの部分展開の応用らしい)

ちなみに、この機体は元々ISとして開発されたものではないので世代としての分類はない。

(表向きには束が開発した第3世代機となっている。)

単一仕様能力 トランザム

機体の全機能を一時的に上昇させるガンダムの単一仕様能力。使用後は粒子残量が減少するため機体性能が著しく下がる。

元々は太陽炉に備わっていた機能だが、ISが操縦者を刹那だと認識しなければ発動しないため単一仕様能力に分類される。

第0・5話 転入前夜（前書き）

連載開始そうそう亀更新でごめんなさい。

それではどうぞ。

第0・5話 転入前夜

あれから2週間後

時刻は10時45分、刹那・F・セイエイは束に指示された通りにIS学園の正門前にいた。

「まさか俺が学校に通うことになるなんてな・・・」

神のため と言われ戦いに身を投じ、その後もソレストルビーン
グのガンダムマイスターとして少年時代を過ごした彼にとって、学
校など無縁の存在だった。

その自分が別世界の学校に通おうとしていることに刹那は皮肉を感じた。

「刹那、誰か来たぞ。」

テイエリアに言われ視線を前方に向けると、黒のスーツを身につけた長身の女性が近づいてくるのが分かった。

「お前が束の言っていた刹那・F・セイエイだな。」

女性は刹那の前で立ち止まり、唐突に口を開いた。

「私は織斑千冬、このIS学校の教師だ。お前の素性についてはあいつから聞いている。誰かにばらしたりしないから安心しろ。」

ここで言う あいつ とは恐らく束のことだろう

(ちなみに、以前彼女のことを篠ノ之と呼んだら「束って呼んで」と注意された、何故だ?)

「刹那・F・セイエイだ。よろしく頼む。」

「テイエリア・アーデだ。僕のことは刹那のISのAIだと思って貰っていい。」

「分かった。それと、学園では私のことを織斑先生と呼ぶようにいいな。」

束同様に危険な雰囲気を感じるが、一応信頼に値する人物のようだ。相手はこちらを警戒しているようだが……

「了解した、織斑せ……」

(バシッ!)

「敬語を使え。」

「了解しました。」

出席簿らしき本で叩かれた。強い……

「よろしい。では入れ、入学手続きは済ませてある。この学園におけるマニュアルは勿論読んであるな。」

「はい。」

「それと、お前の部屋がまだ決定していなくてな。今日は空いてい

る教師用の部屋を使って貰う。」

それだけ言って彼女は無言で歩き出した。刹那もそれに従い後ろを歩く。

しばしの無言の移動のすえ刹那は1つの部屋へと案内された。

「ここだ、入れ。」

そう言って指示された教師用の部屋は、かつて見た王留美の屋敷程ではないにしろ、高校の教師用の部屋としては豪華過ぎる内装の部屋だった。

「明日の朝、授業開始の15分前には朝食を済ませ私の所へ来い。」

「了解しました。」

そう言うと彼女は微笑む様な顔をして何かを呟いた。

「にしても、あいつが身内以外の男に興味を示すなんてな・・・」

残念ながら、その呟きは刹那の耳には届かなかったが。

「？何か行つたか？」

「いや、なんでもない。そんなことよりセイエイ、明日から早速だがISの訓練なども行つう。しっかり体を休めておけよ。お前の部屋は明日までになんとかする。」

「了解しました。」

刹那の返事を聞いた後、彼女は扉を閉め去っていった。

「刹那、君は彼女のことをどう思う？」

彼女の足音が聞こえなくなった後、そう尋ねてきたのはティエリアだ。

「当分の間は信頼してもいい人間だとは思う、だが・・・」

「だが？」

「東同様、何か大きな事実を隠しているような気がする。」

「君のイノベーターとしての感がそう感じているのか？」

「そうだ。」

「分かった。」

そう言ってティエリアは姿を消した。

(しかし、学校か・・・)

刹那が自分の中で高まる学校というものに対しての心の高まりに気がかぬまま、革新者の夜は過ぎてゆく。

第0・5話 転入前夜（後書き）

作者「今回から後書きをテイエリア君と一緒にやって行くことにしましたー。はーい拍手、パチパチ。」

テイエリア「なっ！勝手に決めて貰っては困る！ 第一、君にそんな暇があるのか？そんな暇があるのなら1話1話を長くする努力をするべきだ！」

作者「うおっ！いきなり拒否られた！ だ、大丈夫、次話からは長くする努力をするよ！」

テイエリア「たとえ次話からなつたとしても、今回の話はなんだ！ 亀更新のくせに短すぎるじゃないか！」

作者「それは・・・実は私の家は福島県のいわき市にあつて、福島第一原発から40km程の位置にあるんだ・・・家は高い場所にあるから津波の被害はなかつたけど、放射能の影響を恐れて祖母の家まで避難しているんだ。学校の友達も皆バラバラになつてしまつて、小説を書く気になれなかつたんだ・・・」

テイエリア「そうだったのか・・・すまない。」

作者「いや、君が謝ることじゃないよ。私より酷い境遇の人だつて大勢いるんだ。テイエリア、私はこの場を借りて被災地の方々への応援メッセージを送りたい。」

テイエリア「ああ、そうしよう。」

作者& a m p・ティエリア「地震の恐怖に負けるな!ガンバレ、ニ
ッポン!」

第1話(1) 転校生は革新者(前書き)

7巻読みました。

ちなみに作者が一番好きなヒロインは楯無です。

あと、タイトルそのままでごめんなさい。

第1話(1) 転校生は革新者

翌日、1年1組にて

「織斑君、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

朝、席に着くなり、世界で唯一ISを動かせる男 織斑一夏はクラスメイトに話かけられた。

「転校生？今の時期に？」

今はまだ四月だ。なんで入学じゃなくて転入なのだろう。

しかもこのIS学園、転入はかなり条件が厳しかったはずだ。試験は勿論、国の推薦がないと入れないようになっていいる。

ということとは、つまり・・・

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ。」

「ふーん。」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら。」

そう言いながら腰に手を当てたポーズをとっているのは、イギリス代表候補生 セシリア・オルコットだ。

「このクラスに転入してくるわけではないのだから？驚く程のことでもあるまい。」

この声はさつきまで自分の席にいたはずの俺の幼なじみ篠ノ之箒だ。

「あれ、私は転校生は男の子だって聞いたんだけどな。」

そう疑問の声をあげたのはクラスメイトの のほほんさん、本名は・・・覚えてない・・・

「えっ！その話本当！？」

「うん、3組の子が朝早くに、制服を着た織斑君以外の男子が食堂からでるのを見たらしいよ。」

「もしその話が本当なら大スcoopだよ！」

「織斑君と学園の人気を二分するかもしれない人物の登場だよー！」
すぐにクラスは噂話の嵐で埋めつくされる。
人気ってなんのことだ？

「でも、・・・どちらにしても、どんな奴なんだろうな？」

「む・・・気になるのか？」

「ん？まあな。」

「ふん・・・今のお前に他人を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに。」

「そう！そうですわ、一夏さん！クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・

オルコットが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持っているのはクラスでわたくしと一夏さんだけなのですから。」

『だけ』という部分をえらく強調された・・・でもまあ、確かにそうだ。他のクラスメイトじゃ訓練機の申請と許可、整備に丸一日かかってしまうから手っ取り早く模擬戦をするならセシリアに頼むのが早い。

「まあ、やれるだけやってみるか。」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきますんと！」

「そうだぞ。男たるもの、そのような弱気でどうする！」

「織斑君が勝つとクラス皆が幸せだよ！」

セシリア・篝・クラスメイトと口々に好きなことを言ってくれる。そうは言われても、ここ最近はISの基本操縦でつまずいていて、自信に満ちた返事はできない。

「織斑君、頑張つてね！」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ、専用機を持つてるクラス代表って1組と4組だけだから余裕だよ。」

やいのやいのと楽しそうな女子一同の気概を削ぐわけにはいかないので俺は「おう」とだけ返事をする。

「・・・その情報、古いよ。」

ん？教室の入口からふと声が聞こえた。なんか、すごい聞いたことのあるような声だが・・・

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝出来ないから。」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていたのは・・・

「鈴・・・？お前、鈴か？」

「そうよ、中国代表候補生、凰 鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ。」

ふっと小さく笑みを漏らす。トレードマークのツインテールが軽く左右に揺れた。

「何格好付けてるんだ？すごい似合わないぞ。」

「んな・・・！？なんてこと言うのよあんたは！」

おお、やっと普通に喋った。なんださっきの気取った喋り方は、軽く引いたぞ。

「おい。」

「何よ！？？」

バシッ！聞き返した鈴に強烈な出席簿打撃が入った。・・・鬼教官登場である。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ。」

「ち、千冬さん・・・。」

「織斑先生と呼べ。さつさと教室に戻れ、そして入口を塞ぐな。邪魔だ。」

すすすすとドアからどく鈴。その態度は100%千冬姉にビビっている。

こいつ、昔から千冬姉苦手だよな。なんでだか知らんが。

「また後で来るからね！逃げないでよー夏！」

なんで俺が逃げるんだよ。

「さつさと戻れ。」

「は、はいっ！」

二組へと向かって猛ダッシュ。

『ドンッ』

「きゃっ！」

そして鈍い衝突音と短い悲鳴。

うん、昔のままの鈴だな。しかしなんでアイツは格好つけてやって

来たんだ？高校デビューか？そんなタマでもないだろ。

「ていうかアイツ、IS操縦者だったのか。初めて知った。」

そう素直に思ってた口に出した・・・それがまずかった。

「・・・一夏、今は誰だ？知り合いか？偉く親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？あの方とはどういう関係で・・・」

その他クラスメイトからの質問集中砲火。ああ、馬鹿・・・

バシンバシンバシンバシン！

「席に着け、馬鹿ども。」

千冬姉の出席簿が火を噴いた。・・・俺のせいか？・・・俺のせいだな。

こうして今日も普段通り、ISの訓練と学習が始ま・・・・・・らなかった。

「刹那・F・セイエイだ。よろしく頼む。」

「刹那のISのAI、ティエリア・アーデだ。よろしく頼む。」

ミス織斑に指示された通り俺達が自己紹介を済ませると、意外にも教室内は静寂に包まれた。

まるで時間が止まったかのような無音状態である。

ティエリアも同じく状況が理解出来ないのか、困惑の表情を隠せていない。

しかし次の瞬間には逆に、女生徒の声で教室内は満たされる。悲鳴にも似た黄色い声だ。

『きゃ~~~~~!』

「来た〜! 男子二人目!」

「しかも織斑君にも劣らないぐらいのイケメン!」

「黒髪くせつ毛が最高!」

「鋭い眼光が素敵!」

「アーデ君もちっちゃくて可愛い!」

「守られた〜い!」

「攻められた〜い!」

二度に及ぶ予想外の事態は俺の理解の範疇を越えていた。

俺は高校における自己紹介の仕方を何か間違えてしまったのか・・・

・いや、それはないはずだ。では、一体何故?

ふとティエリアを見ると、彼は彼女達の台詞から何かを理解し苦笑いをしている。(ティエリア、これはいったいどういうことだ?)

俺は最後の望みとばかりにティエリアに脳量子波で尋ねてみるも・

（無理だ。これは君が最も苦手とする分野の問題だ。）

と返されてしまった。

ティエリア、何故おかしそうに微笑むんだ？

「はぁ・・・黙れ馬鹿ども！このクラスにまともな人間はいないのか？」

ミス織斑の一声によって女生徒の叫びはやっと収束した。

しかし、俺の頭は未だに理解が出来ていない・・・まあ、当面の間問題はないであろうが・・・

「セイエイ、お前の席は織斑の列の一番後ろだ。さっさと座れ。」

そう言われ視線を前方に戻すと、目の前に座った男子生徒と一瞬目が合った。

織斑一夏。事前に目を通した資料によると、世界で唯一ISを動かせる男でありミス織斑の弟らしい。

彼は自分の境遇をどう思っているのだろうか？

もしま、かつての自分と同じ様に 自分と他人の違い を強く意識しているのではないだろうか・・・

いや、今そのような事を考えても仕方ないだろう。

それに彼にとつて、この事はそれほど重要な事ではないのかも知れない。・・・なんとなくそんな気がした。

俺が席に着くとミス織斑はSHRを始めた。

何はともあれ、俺の人生初となるスクールライフは始まった。

第1話(1) 転校生は革新者(後書き)

作者「さあ、今回も始まりました、後書きコーナー。パーソナリティはわたくし作者とティエリア・アーデがお送りします。」

ティエリア「何故唐突にラジオ風にやろうとするんだ。」

作者「まあ冗談は置いておいて、何を語ろうかティエリア君？」

ティエリア「！それを考えるのが君の役目だろう、まさか考えていないのか！」

作者「いやー、ISの7巻読んだり本編書いてたりしてたんだけど、投稿しようと思ったら後書きの事すっかり忘れてて・・・いや、まじでどうしよう。」

ティエリア「それをわたしと一緒に考えようというわけか？」

作者「うん」

ティエリア「これだから君は。まあ、仮にも君は作者だから協力はするがな。」

作者「ありがとう、ティエリア！ちなみに案としては

?ティエリアのガンダム解説

?ゲストを呼んでのトーク

?ティエリアのガンダムクイズ

の3つがあるんだが、どれがいいと思う？」

ティエリア「どれでもいい、どれにしる書くのは君だ。」

作者「ぶっちゃけないでくれる・・・もう決めた!??を交互に、?
を毎回やることにするよ!」

ティエリア「出来ればもっと早く決めて欲しかったな。」

作者「ということでは次回から後書きはこの内容でやります。さよなら」

第1話(2) VSガンダム(前書き)

長らくお待たせいたしました。

待たせてしまつて本当にすみません。

待つてる間に遂にはガンダム新アニメまで決定してしまいましたね。

しかも子供番組つてorz

コロコロコミックにまで宣伝書いてありましたよ。

そんなAGEの事より今回はやっと模擬戦です。

どろどろっ

第1話(2) VSガンダム

「これよりISの模擬戦闘を実演してもらおう。織斑・オルコット・セイエイ、前に出ろ。」

本日も例外なく、俺達1組の面々は鬼教官のありがたき御指導をいただく為に第2アリーナに整列していた。

ちなみに例の転校生、刹那だが・・・ISスーツを見た時は流石に驚いた。なにせ俺達のISスーツとは根本から異なるデザインをしている。首から下全てを包み込む様な青いスーツは、所々に従来のISスーツにはないパーツがついており、唯一スーツに包まれていない頭部もバイザー付きのヘルメットをかぶるようだ。さながらSFに出てくる宇宙服のようである。

・・・ちよつとカッコイイ・・・

(バシンッ！)

「話に集中しろ、織斑。」

「はい。」

最早定番となった出席簿アタックを頂いた。

それでいいのか・・・千冬姉・・・

「わたくしはどちらの方と模擬戦を行えばよろしいのですか？まあ、わたくしならお二人を同時に相手しても構いませんですよ。」

「ではオルコット、お前は織斑とパートナーを組み、セイエイと模擬戦をしろ。」

「ええっ！ど、どうゆうことですかの先生！．．ま、まあ一夏さんと組めるのは嬉しい事ですが．．何故わたくしが二人がかりで一人と戦わねばなりませんの！？」

ん？真ん中の方の言葉が良く聞き取れなかったな？まあ、大方千冬姉に対する文句でも言ったのだろう。

「今のお前ではセイエイには勝てん。お前達二人がかりでも勝てる望みは薄いぞ。」

「そ、それはどういふ．．．」

「織斑、お前もそれでいいな。」

「は、はい！分かりました。」

セシリアはまだ納得がいかないようだが仕方ない。それに恐らく、このまま文句を言い続けても出席簿アタックが待っているだけだ。

「それでは各自ISを展開して所定の位置へ移動しろ。」

「一夏さん、あの男と先生の鼻をへし折ってやりましょう。」

「ああ、俺もやるからには全力でやる！」

そして俺とセシリアは白式とブルー・ティアーズを展開した。

俺がヘルメットのバイザーを下ろすと、ティエリアは俺に問いかけて来た。

「刹那、彼らの機体はイギリスの第三世代機　ブルー・ティアーズ
と篠ノ之束が作った第四世代機　白式　だ。どのガンダムを使う。」

ティエリアはそう尋ねてきたが、俺の心はとうの昔に決めていた。

元の世界で全ての戦いの狼煙となったこの機体なら、この世界での俺の始まりを飾るにふさわしい存在となってくれらるだろう。

俺の口は力強く、その機体の名をつむぐ。

「ガンダムエクシア。」

胸に掛けたペンダントを中心に全身に光の膜が広がる。

現れたのは、青を基調とし頭部に特徴的なV字型のアンテナを持つ機体。

ガンダムエクシア。

「あれが刹那の機体・・・」

俺は今、白式を展開し、上空200m程の所でセシリアと共に浮遊している。

後を追うように刹那もISを展開し上昇してきたが、あいつのISはスーツと同じく特殊だった。

なにせ全身装甲である。

肌やスーツが全く露出していないISなど見たことがなく、まるでロボットが動いているような印象がある。さらには背中から白い粒子の様なものを出している。

「ISスーツといい、AIといい、とことん変わったお方ですね。」

セシリアもそれには同感なようで、そんなことを呟いている。

そこにオープンチャンネルで山田先生の声が響いた。

「全員、所定の位置に着きましたね。それでは模擬戦を開始して下さい。」

「了解。刹那・F・セイエイ、目標を駆逐する。」

まず最初に動いたのはオルコットだった。ピットを4機同時にこちらへ向けて射出し、連続射撃を仕掛けてくる。

俺はその射線を回避しつつ相手に接近する。

どうやら資料で見た偏向射撃は使えないようである。

右腕のGNソードガンモードで2機撃墜。さらにすれ違いざまに2本のGNブレードで2機を切断、撃墜する。

「速い！」相手の口からそんな言葉が漏れた。

さらに俺は肉薄し2本のGNブレードで切りかかるようにするが、とつさに後退する。

すると次の瞬間、さっきまで俺のいた位置に織斑の持つ接近ブレードが横から振り下ろされていた。

「くそっ、避けられた！」

セシリアに接近した刹那に零落白夜を発動し、切りかかったが後方へと回避されてしまった。

「逃がしませんわ！」

そのスキをついてセシリアは2機のミサイルビットを発射する。

しかし刹那は腰から2本のビームダガーを引き抜き、投てきした。

2本のダガーはビットに直撃し撃墜、爆発を起こす。

刹那の周囲は爆煙に包まれた。

俺はそのスキに零落白夜を再び発動、瞬間加速を発動し切りかかる。

だが刹那も右腕の銃と剣が一体化した様な武装の刀身を展開し雪片式型を弾いた！

「しまっ・・・！」

次の瞬間には刹那は肩のビームサーベルを2本引き抜き、俺の胸に突き立てていた。

絶対防御が発動し白式のシールドエネルギーが一気に削り取られる。

『シールドエネルギー0、戦闘継続不能』

ISアーマーの各所から白い煙が吹き出し、ゆっくり降下して行く。

「くそっ！ここまでか……」

「こんな……いとも簡単に！」

セシリアはスターライトmkIEEを放ちながら後退するも、刹那は機体のスピードを生かしてどんどん距離を縮めてくる。

「くっ！インターセプター！」

セシリアはインターセプターをコールするが遅すぎた。刹那は腰の2本ね実体剣でインターセプターとスターライトmkIEEを手から弾き飛ばす。

セシリアに残された武器はもうない。

「ま、まいりましたわ。」

セシリアの降参宣言の後に山田先生の声がオープンチャンネルで響き渡る。

「試合終了。勝者、刹那・F・セイエイ。」

第1話(2) VSガンダム(後書き)

作者「ティエリアのパーフェクトガンダム教室、始まるよ〜！」

ティエリア「まで！なんだそのコーナー名は!？」

今回紹介するのはGN-001ガンダムエクシアだ。マイスターは本作品の主人公でもある刹那・F・セイエイだ。ガンダムの中でも格闘戦に特化した機体であり、接近格闘タイプといえる。開発コードは セブンスード、その名の通り4本のビーム系と3本の実体剣、計7本の斬撃武器を装備している。

後に改修されたリペア2は一撃必殺というコンセプトで作られており、GNドライブのリミッター解除・GNソードの発展型GNソード改の装備・粒子供給コードの内部構造化などが主な変更点だ。」

作「はい。ありがとうティエリア。それじゃあ続いてクイズよろしく。」

ティ「この作者楽しただけじゃないのか・・・？はあ、問題『エクシアに実体剣が装備された背景にはとある理由があった。その理由を答えろ。』」

作「第一回目だから簡単にしたよ。答えは次回の前書きで。それじやまた次回〜。」

第1話(3) 対抗戦へ向けて(前書き)

前回のクイズの答えは

GNフィールドを持つ機体、つまりガンダムやGNドライブ搭載機が敵となった際、抑止力とすること

でした。

「SILVER」さん、「シーバス」さん、「フレイムバースト」さん、「erugon」さん、「ライトニングサンダー」さん
わざわざお答え頂きありがとうございます。

今回はオリキャラ(？)って感じの人が出てきます。

第1話(3) 対抗戦へ向けて

時間は過ぎ、昼休み

俺は今、刹那と共に食堂へと向かっている。

ちなみに刹那は俺の「一緒に昼食を食おう」という申し出を二つ返事で了解してくれた。男友達っていいな。

それと当然(?)のことながら、廊下には刹那を一目見ようという生徒が両脇に列を作り、俺達の後ろには箒とセシリアを含めたクラスメイトぞろぞろと付いて来ている。
何処の大名行列だよ。

っと、そうこうしているうちに食堂へ着いたようだ。

「待ってたわよ、一夏！」

「「「あっ」「」」

完全に忘れてた。

「ちょっと！なによ今の『あっ』って！『あっ』て！それが丸一年ぶりに再会した幼なじみに対する態度なの!？」

何故だろう？今のセリフ凄いデジャウ^uを感じる。

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」

周りからの視線も凄いし

「う、うるさいわね。分かってるわよ。」

ちなみにその手にはラーメンの鎮座したお盆が

「のびるぞ。」

「わ、分かってるわよ！大体アンタを待ってたんでしょうが！何で早く来ないのよ。」

現在の周りの状況を見て自分で察してくれ。

まあ、こいつがうるさいのはいつものことだし、とりあえず俺は食券をおばちゃんに渡す。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病院しなさいよ。」

「どっついう希望だよそりゃ・・・」

「あー、ゴホンゴホン！」

「ンンン！一夏さん？注文の品、出来てましてよ？」

「ああ。向こうのテーブルが空いてるな、行こうぜ。」

鈴を含めた全員に促す。クラスほぼ全員に近いのだが、今日は刹那を一目見ようと昼食まで抜く奴がいるらしくテーブルが結構空いている。ラッキー！

「鈴、いつ日本に帰って来たんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、何IS使ってるのよ。ニユースで見た時びっくりしたじゃない。」

「一夏、そろそろどういふ関係か説明して欲しいのだが。」

「そうですね！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってるらしいやらの！？」

疎外感を感じてか、篝とセシリアが多少トゲのある声で訊いてくる。

ちなみに他のクラスメイトはこちらに耳を傾けているのが半分、刹那に興味津津なのが半分といった感じだ。

「べ、べ、べ、別に私は付き合ってる訳じゃ・・・」

「そつだぞ。何でそんな話になるんだ？ただの幼なじみだよ。」

「・・・」

「？何睨んでるんだ？」

「何でも無いわよっ！」

いきなり鈴が怒った。変な奴

「幼なじみ・・・？」

怪訝そうな声で聞き返してきたのは箒だった。

「あー、えつとだな。箒が引越していったのが小四の終わりだろ？鈴が転校して来たのは小五の頭だよ。で、中二の終わりに国に帰ったから会うのはちょうど一年ぶりだな。」

「ふうん、そうなんだ。」

鈴はじろじろと箒を見る。箒は箒で負けじと鈴を見返していた。

「はじめまして。これからよろしくね。」

「ああ、こちらこそ。」

そう言っつて挨拶を交わす二人の間で、何故か火花が散った様に見えるた。

「ンンンッ！わたくしの存在を忘れて貰っては困りますわ。中国代表候補生、凰 鈴音さん？」

「・・・誰？」

「なっ！？わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコ

ツトでしてよ!?まさかご存知ないの?」

「うん。あたし他の国とか興味ないし。」

「な、な、なっ・・・!?」

言葉に詰まりながらも怒りで顔を赤くしていくセシリア

「言っておきますけどわたくしは貴方のような方には負けませんわ
!」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん。勿論、朝
ぶつかつて来たそっちの男にも。」

「ぶつかつて来たのはそっちに見えたが?」

そう呆れながらティエリアだった。

「なっ!誰よアンタ!?!」

「僕は刹那のISのAI、ティエリア・アーデだ。」

ちなみに席に着いた時から刹那は黙々と箸を進めている。
ていうか教室から出ていく時、鈴がぶつかったのって刹那だったん
だな。

「ふ、ふん!それより一夏、アンタクラス代表なんだって?」

「お、おう。成り行きでな。」

「ふーん・・・あ、あのさあ、ISの操縦見せてあげてもいいけど？」

「そりゃ助か・・・」

ダンッ！テーブルが叩かれる×2。篝とセシリアがその勢いのまま立ち上がる。

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ。」

「貴方は二組でしょう！？敵の施しは受けませんわ」

うお、顔が怖いぞ二人とも。よほどクラス対抗戦に燃えてるんだな。

「あたしは一夏に言ってんの。関係無い人は引っ込んでよ。」

「か、関係なら有るぞ。私が一夏にどうしても頼まれているのだ。」

どうしても とまで言った覚えは無いんだが、篝。

「一組の代表ですから、一組の人間が教えるねは当然ですわ。あなたこそ、後から出てきて何を図々しいことを・・・」

「後からじゃ無いけどね。あたしの方が付き合いは長いんだし。」

「そ、それを言うなら私の方が早いぞ！それに、一夏は何度もうちで食事をしている間柄だ。付き合いはそれなりに深い。」

「うちで食事？それならあたしもそうだけど？」

「いつ、一夏!どういつことだ!?聞いていないぞ私は!」

「わたくしもですわ!一夏さん、納得のいく説明を要求します!」

「説明も何も・・・幼なじみで、よく鈴の実家の中華料理屋に行つてた関係だ。」

俺が嘘偽りなくそう言つと、さっきまで余裕の表情を見せていた鈴が途端にむつとふてくされる。

対称的に、篝とセシリアはほっとした顔をした。

「な、何?店なのか?」

「あら、そうでしたの。お店なら別に不自然なことは何一つありませんわね。」

話を聞いていたクラスメイトの女子も同じように緊張と緩和を繰り返している。

「親父さん、元気にしてるか?まあ、あの人こそ病気とは無縁だよな。」

「あ・・・。うん、元気・・・だと思つ。」

うん?急に鈴の表情に陰りが差して、俺は妙な違和感を覚えた。

「そ、それよりさ、今日の放課後って時間ある?あるよね。久しぶりだし、何処か行こうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ。」

「あー、あそこ去年潰れたぞ。」

「そ、そうなんだ。じゃ、じゃあさ、学食でもいいから。積もる話もあるでしょ？」

うーん、特にないぞ。

「・・・生憎だが、一夏は私とISの特訓をするのだ。放課後は埋まっている。」

待て篇、何でお前が決めるんだ？

「そうですね。クラス対抗戦に向けて、特訓が必要ですよ。特にわたくしは専用機持ちですから？ええ、一夏さんの特訓には欠かせない存在なのです。」

さつきまでの劣勢（？）は何処へやら、一転攻勢に転じた二人はここぞとばかりに俺への特訓を持ち出す。

「じゃあそれが終わったら行くから。空けといてね、じゃあね一夏」

そい言うと、俺の答えも待たずに鈴は片付けに行つて、そのまま学食を出て行った。

断ることもできなかつたら、絶対待ってるしかないじゃねえか・・・

「一夏、当然特訓が優先だぞ。」

「一夏さん、わたくしたちの有意義な時間も使っているという事実

をお忘れなく。」

そしてこっちも断れる状況ではなかった。

「君も刹那と同じタイプの人間のような。苦労しそうだ。」

ティエリアが哀れみの目を向けてくる。

「「?」どういうことだ?」「」

そして俺と刹那の声が重なった。

「「え?」「」

放課後の第三アリーナ。そこで間抜けな声をあげていたのは『打鉄』と『ブルー・ティアーズ』をそれぞれ装備・展開した篠ノ之とオルコットだった。

その視線は真っ直ぐにこちらへと向けられている。

「ど、どうして貴方がここにおりますの、セイエイさん?」

「ああ、それは俺が頼んだからだよ。」

その俺への間に答えたのは『白式』を展開した織斑だ。

「ほら、今までセシリアにばかり相手してもらってたから近接格闘戦の訓練が足りてなかっただろ？今日の模擬戦からも分かる通り、刹那の剣捌きはすごかったから特訓に付き合っただけで貰おうと思っただ。」

「でもそれはわたしが・・・」

「ああ悪い、等。まさかこんなにあっさり訓練機の使用許可が下りるとはおもってなかったんだ。」

篠ノ之がうなだれているが、そろそろ始めた方が良かったらう。

「では俺は近接格闘戦で織斑と闘えば良いんだな？」

「ああ。だって今日の模擬戦を見るに、お前のISって近接格闘型だろ？」

「それは正解でもありハズレでもある。俺達のIS『ガンダム』はISアーマーを多数保存してある。射撃型・砲撃型などを自由に選択して使用できるんだ。束に作って貰った。」

「『束さん(あの人)(篠ノ之博士)に！』」

「それに状況に応じてISアーマーを変更出来るってことはまさかそのISは第四世代機ということですか！？」

「いや、それは違う。流石に戦闘中にISアーマーの交換は出来なからな。このISは第四世代機とは呼べない。」

三人、特に篠ノ之と織斑は驚きを隠しきれていない。

「話が逸れたな。とりあえず訓練を始めよう。」

俺は授業の時と同じく『ガンダムエクシア』を展開し白式を身に纏った織斑と向かい合う。

「あ、ああ、分かった。あと、俺のことは一夏って呼んでくれよ。俺もお前のことは刹那って呼ぶから。」

「了解した。では、行くぞ一夏！」

「ああ、いいー！」

「今日はこのくらいで終わりにしよう。」

そう言っつて刹那はピットへと向かって行く。

「ぜえぜえと息が切れている俺に対して刹那はけろりとしている。一体どんな体してんだよ。」

「ふ、ふん……鍛えていないから……そうなるのだ……」

「そうですねよ、一夏さん……わたくしたちの代表なのでから……もつと頑張っていただかなくては……」

そういふ筈とセシリアも俺程づはないにしろ肉体的疲労は相当のものだらう。

何と刹那、俺達三人を一人で相手し続けて、殆どダメージを負わずに圧勝し続けてみせたのだ。

流石に長時間の戦闘なので無傷とはいかないが、それも少し剣の先がかすった程度。ダメージらしきダメージはない。

刹那だったら千冬姉とも互角に戦えるんじゃないだろうか？

「何をしている一夏、早くピットに戻れ。」

そう筈に言われて俺は刹那が入っていったピットに戻ろうとする。

「お、おう。……って筈？何でこっち側に来るんだ？」

「わたしもピットに戻るからだ。」

「いや、セシリアの方に……」

「ぴ、ピットなどどちらでも構わないだらう！」

(刹那、気づいていたか?)

ピットに入りエクシアを解除した後、頭の中に脳量子波によるティエリアの声が響いた。

(ああ。)

俺も同じく脳量子波でその問に答える。

(訓練をしている間、客席の一点から常に視線を感じていた。)

もっと正確に言えば、休み時間などに生徒達から向けられていた視線とは異なる、まるで俺の『戦い』を見ている様な視線。

(君はどう思う?)

(監視・・・いや、観察か。)

(ああ、僕も同意見だ。現状では気付かぬフリをしていた方が良かったろう。)

(そうだな。そうしよう。)

わたし、更識楯無は寮の自室で空中投影ディスプレイに表示された資料に目を通していた。

内容は噂の転校生、刹那・F・セイエイに関するもの。

(篠ノ之束が開発した第三世代IS、何か嫌な予感がするわ・・・
念のためルームメイトには監視も兼ねてあの子を付けておいたけど・・・)

そこまで思考したところで自室のドアが開かれる。おそらくルームメイトが帰ってきたのだろう。

「おかえり。どうしたの？そんなに嬉しそうな顔して？」

彼女の顔はヤケにニヤけている。まあ、この子の行動が変わっているのはいつもの事なんだけど。

「ええ、ちよつとね。例の二人目の男子がアリーナで訓練してるのを見てきたの。」

「へえ〜。で、どうだった？」

「好意を抱くわね。」

「・・・・・・好意？」

そして彼女は不敵に微笑み、

「興味以上の対象ということよ。」と自慢気に語った。

第1話(3) 対抗戦へ向けて(後書き)

作者「後書きのコーナー。今回はゲストを呼びます。記念すべき第一回はネーナ・トリニティちゃんです。」

ネーナ「こんにちわ、ネーナです！」

ティエリア「ゲストを呼ぶのはいいが、何故一人目が彼女なんだ？」

作「釘宮さんが好きだから。」

ティ「そんな理由でいいのか!？」

ネ「うるさい、うるさい、うるさい!」

ティ「君も悪のりはよしてくれ!」

作「ナイス、シャナネタ!今も来月出る22巻がたのしみだよ。」

ネ「ふふん、感謝しなさい。」

ティ「……せめてネタやるにしても、同じMFの作品にしないか?」

作「あれ?ティエリアってルイズファンなの?それともアリア?」

ティ「そういうことではない!!もいい、クイズいくぞ。問題」
彼女、ネーナ・トリニティと劇場版で登場した科学者、ミーナ・カイマンとの関連性を答えろ」

ネ「中の人と同じとか答えたら、風穴あけるわよ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1041r/>

IS インフィニット・ストラトス ~革新者 介入~

2011年9月17日22時25分発行